



下村恵美子

初！対談

村瀬孝生

あきらめる勇氣

老病死を地域、家庭でシェアする

北海道の「デイサービスセンター笑や」が毎年、開催している「地域で老いを支えるセミナー」に、老人ケアの^{さきがけ}的存在である「宅老所よりあい」「第2宅老所よりあい」の下村恵美子さんと村瀬孝生さんが登場。公の場で対談するのは初めてだという。情のひと下村さんと知のひと村瀬さん。「どうなるかまったく予想が付きません」という村瀬さんの言葉どおり、ケアの本質に切り込む斬新な展開になりました。

よりあいの原点

下村恵美子：「宅老所よりあい」をつくるきっかけは、マンションでひとり暮らしをしていた92歳の大場さんに、施設入所の説得に行ったことでした。彼女は私にこう言いました。

「ここでのたれ死にする覚悟で生きている。赤の他人のお前に言われる筋合いはない！ いらんこったい!!」

92歳でひとり暮らしで、腐ったものを食べて、ご近所からやっかい者扱いされていることは十分承知して生きているのです。すごいはあさんだと思いました。

村瀬孝生：大正とも昭和ともちがう明治気質が、大場さんにはたしかにありましたね。

僕は特養ホームに8年勤めましたが、その頃は100人のうち大体7、8割が明治の人でした。明治の人は愚痴も言わないし、気骨もあって凛としていました。だから人の言うこともきかないわけですが（笑）。

下村：大場さんはヘルパーに来てもらっていましたが、入ったヘルパーがことごとく泥棒扱いされるのです。そして、ヘルパーが変われば変わるほど大場さんの混乱は増していきました。誰も信じられなくなり、家に人を入れなくなったのです。

大場さんにはもう出かけていく場もないし、会いにくる人もいない。地域の中で生活しているのだけど、地域から孤立しているのです。私は、大場さんが出かけられる場所をつくり、そこに

会いたい人がいることが大切だと思いました。

お寺の茶室を借りて、始まったのが「宅老所よりあい」です。17年になります。

村瀬：「第2宅老所よりあい」は、福岡市でも山のほう、長住という住宅団地にあります。40年ほど前にできた古い団地なので、高齢化が進んでいます。

きっかけは、48歳でアルツハイマー病を発症した方でした。彼女が住み慣れたこの長住で暮らしていけるようにと、「よりあい」を知っていた友人が、13年前に誘致してできたのが「第2宅老所よりあい」です。

「ひとりの人から始まった」というのが2つのよりあいの原点になっています。今は、地域へ活動が向かっていますが、2か所のよりあいの共通項は「ひとりから始める」だと僕は思っています。下村さんはどうですか？

下村：まわりから疎んじられていたり、デイには年寄りしかなくて、なじめなくて、私にはまだできることがあると嘆いている若年認知症の人……、目の前にそんな困難を抱えた人がいるわけでしょう。ほっとけないですよ。

ちょっと information

ひとりから始まったといえば『一人から始める老人ケア』こちらは起業のススメがテーマです

一人から始める
老人ケア

ブリコラージュ編
三好春樹 監修

体裁：A5判/並製/213頁
定価：1,800円+税
発行：2003年

※ご注文はBBCへ0120-861-863





村瀬孝生（むらせたかお）

1964年生まれ。東北福祉大学卒業後、特養ホームでの生活指導員を経て、「宅老所よりあい」に。1996年から「第2宅老所よりあい」の所長を務める。著書に『おしこの放物線』（雲母書房）『ぼけてもいいよ』（西日本新聞社）『おばあちゃんが、ぼけた』（理論社）

【第2宅老所よりあい】福岡市南区松原 2-23-14
TEL 092-511-0471 FAX 092-210-9464

思いとか理念とかさまざまに言われるけど、そうじゃないんです。現実のその人を見てしまったら、知らん顔はできない。そういうところからどちらの「よりあい」も始まったと思いますね。

村瀬：感覚としては巻き込まれている感じかな。そういうなかで手探りで、手づくりでやってきたという気がしています。

しんどいなかで、続けてきた理由

村瀬：最近、下村は引退したくてしょうがないんです。

下村：私も村瀬も管理者ですが、介護職でもあります。夜勤もしています。それがとてもしんどい。小さな事業所ですから、管理職・事務職・介護職などと、職種と立場で仕事を分けることはできませんし、だからやってこれたとも思います。どんどん職員の拘束時間が長くなってきている状況のなかで管理者だから夜勤はしないとは言えない状況です。でも、若い時とちがって、身体がもたない。

村瀬：僕も夜勤もやるし、排泄介助もするし、いっしょにお風呂にも入ります。続けていると疲れ果てます。疲れ果てるけど、現場と同じことをするから信頼が得られているのではないかととも思っています。

下村：最初に勤めた精神科、特養ホームにいた現場から数えると、私はもう26年現場にいます。もう、年寄りには薬づけにしないで、縛ってなきゃ、あとはたいしたことはできないけど……、でもそれでいいじゃないかという気がしています（笑）。

村瀬：そういう心境にはなってきますね。でも、老人介護のおもしろさというのは間違いなくある。

下村：そう。それがあから、やれたのでしょいうね。

村瀬：特養ホームにいた時の話です。

97歳くらいのおじいさんがテレビの台座で頭を切ってしまいました。病院で洗浄して縫合してもらったのですが、洗浄の注射器についていた針が水圧で飛び出して、そのおじいさんの傷に刺さってしまったのです。とんでもないことになったと、みんなが慌てていたら、そのじ



下村恵美子（しもむらえみこ）

1952年生まれ。デイサービス、特養ホーム職員を経て、同僚3人で1991年「宅老所よりあい」を開所。固有名詞だった「宅老所」は、今では老人ケアのあり方を示す普通名詞になっている。日本の老人ケアを大きく変えたよりあいのケアの第一人者。著書に『九八歳の妊娠』（雲母書房）

【宅老所よりあい】福岡市中央区地行 1-15-14
TEL 092-761-4260 FAX 092-761-7441



いさんが「ごはん、ごはん」と大きな声で言ったんです。ちょうどホームの夕食時間の5時だったんですね（笑）。もうかなわない、このすごさって何だろうと思いましたね。そういうことが宅老所をやってから連続です。

下村：弟子を大勢抱えて人形制作をしていたキクさんが、個展の直前に脳梗塞で倒れて、特養ホームに入所してきました。食事も排泄も「ここでいい」と言って、ベッドから離れないのです。「2階の窓から投げ捨ててくれ、殺してくれ」が口癖でした。キクさんはただ首を持ち上げて、廊下を行きかう人を見ていました。そのままで2、3か月過ぎました。

ある日突然、キクさんが食堂へ連れていけと言いました。羽織を着て、口紅をつけて食堂へ出て、そして「あの席に座らせてくれ」と席まで指定するのです。その席の後ろには、いつも大声をあげて人を叩くこ汚いじいさんがいました。彼女は、羽織の袖部分に菓子やみかんを入れていて、そっとそのじいさんに渡すのです。その光景が食事のたびに見られるようになりました。どうしてあのじいさんなのか？ 他にもっときれいなじいさんはいるのに……と思う

のですが、キクさんは理由を言いません。

ある日、こっそり私にうち明けてくれました。若い頃、新劇の女優だったキクさんは、同じ劇団の俳優さんとかけおちをしたのだそうです。「昨日、その男がやってきたのよ」と彼女は言うのです。「おまえを探していた」と言って、ギュッと抱きしめてくれたのだけど、オムツをしていることに気がついて「あの時ほどオムツをしているのが歯がゆかったことはない」（笑）。「じゃ、あのじいさんがそのかけおちした男に似ているの？」と聞いたら、「いや、あのじいさんはずっと飼っていた猿のキキにそっくりなので、なんかほっとけんとよ」（笑）。彼女は猿にエサを与えている感覚だったんですね。

一方、そのこ汚いじいさんは、キクさんのことを「おれの女」よばわりするのですが、誰も事実を告げることができない（笑）。

村瀬：幸せな勘違いですね。

下村：だけど、そのこ汚いじいさんのおかげで、キクさんはベッドから離れることができました。それ以降「2階から捨ててくれ」と言わなくなりましたからね。



おかしくてせつないお年寄りのぼけ

村瀬：お年寄りは一生涯懸命生きています。もの忘れとか、今どこにいるのかわからないという状況を抱えながら真剣に生きているなあと思いますね。

マサコさんというおばあさんがいます。彼女は家族の顔を忘れています。家族は来るたびに「私は誰ね？」と聞くわけですよ。マサコさんはムッとします。「知つとるよ」と言うのですが、家族は「なら名前を言ってごらん」とたたみかけます。マサコさんはそのたびに迷（名）答を考えつきます。「知ってるよ……、あんたはあんたよ」と言ったりする。このへんのかげひきが絶妙なのです。お年寄りは抜け落ちていく記憶のなかでなんとかして、相手に迷惑をかけないようにしようと必死なんです。

下村：ぼけのあるお年寄りが一番頭を使っているのじゃないかな。もうフル回転ですよ。なぜ、ここにいるんだろう？ この人は誰なんだろう？ なんて答えたらいいんだろう？ と常に相手の動きと表情と場の状態を見ながら、つじつまを合わせるために一生懸命考えている人たちです。そんな人にドリルなんてやらせちゃいけませんよ（笑）。

村瀬：せつないなあと思うこともありますよ。あるおばあさんは、お茶を飲もうとして湯のみをもって口のところまで持って行くのですが、なぜか口までいくと湯のみが電話になってしまいうらしい（笑）。「もしもし、もしもし」。

応えがないから置く。のどが渴いて、また湯のみを口元まで持ってくると、「もしもし」。これを繰り返しているのです。こっけいなんだけど、せつなくて、気の毒で、そして真剣でという世界です。

下村：そういう場面に出会えるのは、すごく時



間をかけていっしょにいるということなんですよ。特養ホームや大きなデイでもお年寄りのそういう場面に居合わせているんだと思う。だけど、長い時間いっしょにいるなんてことはできないから、気づかないできたんだなあと思う。

ぼけの原因を探しすぎていないか？

村瀬：認知症介護が声高に言われれば言われるほど、介護のおもしろさが薄れてきたような気が僕はしています。たしかにお年寄りの言動には理由があって、その理由にふれた時にああこういうことだったのかと納得する場面はたくさ



宅老所よりあいの風景

んありますよ。

たとえば、朝僕が出勤するとおじいちゃんがやってきて「昨日のオランダ人には話が通じなかった」と言うのです。妙なことを言うなと思っていたら、申し送りで「昨夜じいちゃんが片言の日本語で『アナタ、ニホンジン、デスカ?』と聞いてきたので『ワタシハ、ニホンジン デス』と応えたのですが信用していなかったみたいです」と茶髪で背の高いスタッフが報告をして「ああ、なるほど」と納得するとか… (笑)。

お年寄りは知的能力を失っているんじゃないですね。抜け落ちていくんでしょう。そして残ったわずかな情報でストーリーを組み立てるんで

しょう。

下村：認知症の専門家の意図はわかるんですが、現場にいると不一致感がありますね。ぼけているお年寄りの行動の理由がわかる人が感性がよくて専門性が高いように言われますが、80歳の年寄りのやっていることを、20代、30代に理解しろというのが無理だという感じがする。56歳の私だってよくわからない。

「しょうがないよね」「しかたないよね」が現場で通用しなくなって、理屈で全部語られるようになるのは、どうもよくないと思う。

村瀬：壁にはりついて「ねがね、ねがね、ねがね」って2時間くらい言ってるばあちゃんがい

ます。いくら説得しても止まらない。

ふと気がつくと、みんなの輪に入っている。そうするともう理由なんてどうだってよくなる。本人だってよくわからないんじゃないですかね。そういう時は、「ああ、お疲れさま」ってお茶を出すのでいいんじゃないか。原因を追求することの大切さはあるけど、もうこのへんで止めておきましょうっていうことも大事だと思うし、目の前の年寄りのしていること、そのおかしさ、せつなさ、こっけいさ、そういったものを感じて動くところに、もう一度戻っていきたくと思っています。

笑いとばす、あきらめる勇氣

村瀬:お年寄りには奥の深いことをふと言います。送迎の車の中で、おばあさんがこう言うんです。「私、前は自分が狂っているんじゃないかと不安だったの。今は、狂ってないと不安なの」

下村:敬虔なクリスチャンで、よりあいには賛美歌を歌うボランティアで来ているということにして通っているおばあさんがいます。彼女は、よりあいのお年寄りのふるまいを見て、眉をひそめていたのですが、ある見学者が、「ここはどんなところですか？」と聞いたら、彼女が立ち上がって「ここは光が降り注いでいます。私は家にいるとできないことがたくさんあって自信をなくします。でも、ここに来たらなんとかなると思えるんです」と答えたのです。「ここに来たらごまかせそうだ」って答えた人もいましたよね（笑）。わーっと拍手が起きて、すると彼女がまた立ち上がって賛美歌を歌い始めました。意地の悪い人でみんながいつも気を使っている人なのですが、この言葉で若い職員が、この人につきあえるようになりました。

村瀬:原因を追求し、認知症を理解しながら対

応することだけが僕たちの仕事であるにとらえてほしくない。そこだけを専門性として先鋭化したくない。たとえ問題行動の原因がわからなくても「わからないもの」として受けとめて、つきあい続ける土壌を社会に育むことがより大切なのではないのでしょうか。

だから、どこかでこれ以上は追求しないというあきらめる勇氣をもって、生活者として笑いとばしちゃおうって思います。お年寄りだって笑ってごまかしているんですよ。お年寄りは自らの人生の中でその困難をどう解決するかと^{あがら}抗って、もがいているわけですが、その困難を与えているのは社会の側ではないか、と考えた時、僕たちの仕事はもっとわかりやすくなっていきます。単純にいうと、老いることすらままならないこの社会を変えていくところに僕たちの仕事の本質があるのでしょうか。

もっと自由で多様な死を

村瀬:現代社会の中で、お年寄りたちがほけることでどういう困難を抱えているかが看取りによって、さらに明らかになっているような気がしています。

下村:11年、15年、9年と長くおつきあいした方たちが昨年、続けて亡くなりました。

1人は、この人ほど職員が振り回され、身体中が傷だらけになった人はいないというおばあちゃんです。よりあいが始まった頃から応援してくれていた人なのですが、まさか自分がよりあいの世話になるとは思ってもいなかったのでしょう。送迎の車には乗ってくれるのですが、「悲しか〜、悲しか〜」と言って、よりあいに着いても降りないのです。現実を受け入れるのがいやだったのでしょうね。コンビニのトイレを使って、食事も車の中でという具合で1日車

に乗っていました。よりあいのお手洗いを使うまでに3年かかりました。

そんなふうにつきあってきた人ですが、亡くなる前の日、職員の結婚式に連れていったのです。**村瀬**：聞いた時には驚きました。本当に命がいつ終わってもおかしくないという状態でしたから。

下村：1年前からいつ亡くなってもおかしくないという状況でした。誤嚥があって食べられないと職員も不安になるわけです。でもこの状態

で点滴をするということは、弱っている心臓にさらに負担をかけることになる。家族と何度も話し合っ、おばあちゃんが自分の口から食べられなくなっても本人の生きる力に頼って、それ以上の医療行為はしない、と合意していました。この1年、家族にもう迷いはありませんでした。

少しずつ、少しずつ口から食べてもらっていたのですが、数日、何も食べられない状態になりました。口をあけようとしません。おしっこ



第2宅老所よりあいの風景





家族といっしょにストーリーを描く

村瀬：今、老いづらい、死にづらい、働きづらい世の中になっていますよね。働く側も、書類をたくさん書かせたり、はんこを押させたりして守りの態勢に入っていることを感じるのですが、自分たちのしていることは、それと対極にあると思いますね。契約書などを利用時に取り交わしたりすることにも抗っていたい心境です。

階段をゆっくり降りていくように1年かけて亡くなったおじいさんの話です。あまりにもゆるやかで最後は生きているのか死んでいるのかわからないような感じでした。いつも口をぽかぽかと開けて、じ〜っとしているんです。あんまりじ〜っとしているので、まわりのお年寄りが、この人は大丈夫だろうかと気にしだすのです。「生きてますよ」と職員が言うと「ああ、よかった」(笑)。「口を開けていると虫が入りますよ」と声をかけるおばあちゃんもいて、それなりに存在感があるんですよ。みんなで「千の風になって」を歌っていると、「死んでなんかないません」という歌詞のところで「ハイ！」と大きな声を出して、みんなが驚いたこともあります(笑)。

便に血が混じるようになったので、明日は病院へ行こうと思っていた矢先の突然の死でした。その日は僕が夜勤でした。朝が来て、普通に起きてトイレで排便をしました。日勤の職員が来て、ポカリスウェットをいつもよりすんなり2杯飲んで、大きく呼吸を2回して、すーっと吐いたあとにすんと顎が落ちて亡くなりました。

いつも相談しているお医者さんをお呼んだのですが、24時間以内に診察していないので死亡診断書は書けない。救急車を呼びなさいと言われてきました。家族も僕たちも蘇生術をする気はな

も少ししか出ない。その時期に職員の結婚式があったのです。どうでしょうか。「何があってもうろたえないでいられるか?」と聞くと、「できる」と職員が言うので、じゃあ、連れて行くかということになりました。

結婚式では、目を開けて、まわりをしっかりと見ていましたね。そして、その翌日の夜中に、すーっと息がとまりました。自然な死でした。家族に結婚式の写真を見せましたら「あの世に行くのにこれ以上の^{はなむけ}餞はありません。ありがとうございます」と言っていただけなので、ホッとしたり、これでよかったのだと思いました。

村瀬：この話は家族を含めたみんながどう思ったかというところが着地点なのですよ。病院で死のうが、自宅で死のうが、宅老所で死のうが、最期まで関わった人びとが、これでよかったという合意を得ることができれば、死のあり様はもっと自由で多様になっていくのではないかと。

だけど、この話を聞いた時、管理者として僕は決断できるかなと思いました。

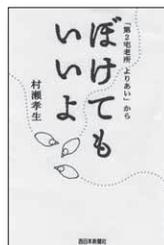
下村：10年以上つきあっていましたからね。その過程があるとないとでは全然ちがうでしょうね。

よりの本の

お問い合わせはブリコラージュブッククラブへ 0120-861-863

九八歳の妊娠

下村恵美子 著
発行：雲母書房
体裁：四六判／277頁
定価：1,800円＋税



ほけてもいいよ

村瀬孝生 著
発行：西日本新聞社
体裁：四六判／316頁
定価：1,800円＋税

おしっこの放物線

村瀬孝生 著
発行：雲母書房
体裁：四六判／202頁
定価：1,600円＋税



おばあちゃんがほけた

村瀬孝生 著
発行：理論社
体裁：四六判／174頁
定価：1,200円＋税

いのですが、救急車を呼ぶとそういうことになります。こんな細い身体に骨がくだけるようなことはしてほしくない。家族が来るまで、このまま安らかに眠らせてほしいと救急隊員に訴えました。すると、「蘇生術はしないという同意書はとってあるのか？」と言うのです。「同意書はないが、そう合意しています」と言ってもダメなんです。家族がくるまで待って、家族の「蘇生術はしない」という言葉を聞いて、救急隊は引きあげました。

今度は警察です。変死扱いです。外傷がないかとか、じいちゃんを裸にして検死を始めて……と大変でした。「蘇生術はしない」という同意書をとっておきなさいと救急隊の人から言われましたが、そんな同意書、とれるわけないでしょう。だって、蘇生術で克服できる時も、もちろんあるわけですからね。

下村：あの時は本当に嫌だったし、歯がゆかった。じいちゃんがじいちゃんらしく死んで、家族といっしょに過ごす一番大切に二度とない時間なのに、警官が6、7人も枕元にいるわけですからね。

村瀬：警察も事件性がないことはわかっているのです。でも、そういう仕組みだから仕方がない。あんな状況、警官も含めて誰も望んでいないんです。本人のためだと言いながら、誓約書や同意書をとることが、結局は自分たちを守るためにしかなくてないのが現実でしょう。それをすればするほど、僕たちは事務的になっていき、大切なものを失っていくのではないかな。

だから、よりの本は誓約書や同意書はとらない。亡くなった時に、これでよかったよねというプロセスがどう家族といっしょにつくれるかだと思っています。でもそれも、紙一重の時代になってきたなと感じますね。下村のように管理者がやめる覚悟でいればいいのでしょうか。

老病死を生活者に取り戻せ

下村：ターミナルとか看取りとかが最近言われ始めて、そのための態勢やマニュアルはどうなっていますかと、よく聞かれるのですが、それらを文章化していくのはいかがなものかと思っています。

その時その時につきあって亡くなった方はこうだったというとても具体的な話しかできないし、それでいいと思っています。看取りだけが切り取られて、まるで介護の先にあるサービスのように語られるのは、間違っていると思います。

村瀬：若い人の死はとうてい受け入れられるものではないと思うのですが、高齢期の死には寿命とか天寿とかいう言葉でもわかるように、どこか、ちゃんと死ねたという「^{ことほ}寿ぎ」（喜び）があるはずなのです。それを今、同じ「死」ということで見失っていないか。

医療モデルでいけば、老いれば何か病名がつくわけです。医療で克服できることならしたほうがもちろんいいでしょう。でも、そのせめぎあいです。医療モデルで考えていくと、どうしたらいいのかわからなくなるんです。

高齢者の死は医療モデルではなく生活モデル、つまり常識で死を考えていく必要があると思っています。そうしないと、素直に死ねなくて、職員は苦悩することになるのではないのでしょうか。

下村：私たちが子どもの頃は、年寄りも生活の中で死んでいきました。学校から帰ってきたら、寝ついていたら赤ちゃんが死んでいたり、生活の中に老いや死があった。それが、今は老いも死も特別なものになってしまいました。

村瀬：老病死が介護保険によって市場にまかされて専門職だけが担う方向では、税だろが保

険だろが破綻していくでしょう。自然の摂理としての死を生活者の手に取り戻す過程で、介護が必要になっていく姿を地域や家庭の中で見て、そして、介護労働を地域の中で再分配して老病死を取り戻していくことに専門性が発揮されないとなぶこの先の展望はないのではないかと考えています。

下村：サービスとして老いを丸投げで受けて、その先の死まで仕事だからとか、専門職だからということで責任をもっていかなくてはいけないというのは、おかしいですね。

亡くなっていく人はあなたのお母さんであって、私のお母さんではありません。赤の他人の私たちだけに介護を委ね、私たちだけが死の間際まで関わるのはおかしいし、ご本人もそんなことは望んでいないと思います。よりあいでは家族に「いっしょにやりましょう」と言います。

「専門職の仕事ですよ。お任せします」ではなく、「いっしょにやりましょう」ということです。ときどき来て、話しかけて、身体をさすってくれ、たまには自宅へ連れて帰ってくれば、きっと看取りもいっしょにできると思っています。

やっと、地域にも家族にもそんなふうに見えるようになりました。

（2008年3月22日、北海道で開催された「第8回地域で老いを支えるセミナー」での対談に加筆・修正しました）

Information

「地域で老いを支えるセミナー」を主催する「デイサービスセンター^{しやう}笑や」代表の佐々木智恵さんは、「宅老所よりあい」で働いた経験を活かして8年前に「笑や」をオープン。毎年よりあいのメンバーを招いてセミナーを開催している。10回までは続けたいというこのセミナーの第9回は、今秋開催予定。詳しくは、「笑や」へ。TEL 011-384-0123・FAX 011-384-0157
誌面には載せられない（部分もある）ケアの最前線にふれることができますヨ。

